

当院回復期病棟での集団レクリエーションの工夫と効果～アンケートによる意識調査を実施して～

清仁会 水無瀬病院リハビリテーション部

○岡本孝浩 (PT)、橋本緑、石井紀子、岡田真也、福田彩乃、曾山明美、三宅悠佑、名部紗矢香、村山拓也

【はじめに】効率的な離床時間延長、病棟生活リズム構築を図るため、回復期病棟にて 1 時間半週 6 回の集団レクリエーション（以下、レク）を実施したところ、レク対象の患者数が少なく、内容の多様性に欠けているという、レクの必要性を疑問視する声が挙がった。そのため病棟及びリハスタッフを対象に、レクへの意識調査のアンケートを行った。

【対象・方法】リハスタッフ 44 名、看護師 18 名、看護助手 11 名を対象に意識調査、意見聴取のアンケート調査を行った。内容は現状レクの 1)認知度 2)効果判定 3)日数 4)時間帯 5)レクに必要と思われること、以上 5 項目。

【結果】1) 認知度:対象者 100%が認知、2) 満足度:患者に効果があったと考えたスタッフは 79%（有効回答率 80%）、3) 日数:多い 16.4%、4) 時間帯:長い 17.8%、5) レクに必要と思われること:レクのバリエーション増加であった。

【考察】今回のアンケートを受け、レクに対して不満を抱くスタッフもいた。患者の疲労度や対象患者の偏りに対する意見が寄せられた。そのため我々は以下の改善策をとった。レク日数を 6 日間から 5 日間、時間帯を 1 時間に短縮した。調査実施前まで要介助者を中心に行っていたが、自立患者の参加も可能になるよう体操、玉入れ、輪投げなどレベルの高い内容も取り入れ、レク内容を日替わりにしてデイルームのボードに掲載することにした。また、リハ的なアドバイスが行えるよう、回復期専従セラピストを担当制にし、デイルームでリハを行うようにした。さらに回復期専従セラピスト以外のリハスタッフに対して、アンケートの意識調査結果、レク目的についてリハ部内で発表を行った。

【反省点】レクにより離床時間延長、病棟生活リズムの構築を目標としていた。しかし、対象患者の ADL に変化、効果があったのか疑問が残った。それらに対して客観的評価である、FIM や HDS-R を早期より用いて比較する必要があると考えた。今後も全体への呼びかけと、客観的評価での分析を続けて行く。

